漢字は心の珠を磨く道具

幼児開発（幼児開発協会機関誌）
『井深大連続対談』より

かれこれ十年にわたる長い知己であるが、二人だけでじっくり話し合う機会はあまりなかった。お互いの考え方をよく理解しあっているだけに、対談はスムーズに……しかし、時折あたらしい発見、同感などを織りまぜて、進行した。

“がっこう”か“学校”か

井深　その覚えさせる方法をひとつ、具体的に……。

石井　その方法は、今から考えますと、必ずしもよくないんですよ。

井深　あ、そうでしたか。しかし、実験ですから……。

石井　小学校の一、二年生が学習する漢字は、基礎的な漢字で、多くは、木とか、山とか、川とかという、象形的なものです。それを元の絵に関連させて教える、ということをやったんです。

井深　あ、象形的にね。

石井　ところが、幼児には、その必要がないのですね。

井深　それは、大人の方には必要なんですね。

石井　そうなんです。大人はそうしないと覚えにくいんですが、幼児にはそうする必要は全くないんです。

井深　あ、それをあとからわかられたんですね。それは非常に貴重なところですからね。パターンということじゃなかったんですね、最初のころは。

石井　そうなんです。今、大人のために“連想式漢字記憶術”という本を出していますが、その“大人用のやり方”を、息子にやらせてみたわけです。まあ、それでもとにかくどんどん漢字を覚えて……小学校に入学するころには、もう、五、六年生の本でも読める、というようになっていました。

井深　ほう……。

石井　それと同時に、私が指導に行っている小学校……八王子にはそのころ九つの小学校があったんですが、そのうちの二、三の小学校の一年生担任の先生に、これ、校長の了解を得て「最初から漢字をぶつけてみる」ということを実験してもらったんです。例えば、“がっこう”と教えないで、最初から“学校”って教えるんです。そういうことを実験してもらって、一年たってその報告を聞きましたところ、「かな書きの場合よりよい」という結果が出たんです。

井深　ええ、ええ。

石井　それで私、これはどうしても自分で実際にやってみたい、という気持が強くなりましたので、昭和二十八年に指導主事をやめて、一年生の担任になりました。

井深　小学校の？

石井　はい。漢字教育は、“一年生は三十字読める”ようにするというのが、当時の文部省指導要領に示された目標なんですが、その十倍の三百字くらいをねらってやってみました。そしたら、私のような、小学校教師の経験の全くない、未熟な者でさえ……しかも当時は、二部授業をやっていまして、正規の授業の半分しか出来なかったのに、「学級平均二百二十字読める」というよい結果が出ました。

井深　でも、国語の時間だけでしょう？

石井　はい。勿論そうです。それも、国語の時間は、漢字だけではありません。いろいろ学習することがあります。ただ、「最初から漢字で表記した形で与える」という原則を主にしました。一年生は、いくら漢字が多くても平気なんですね。このクラスを三年間持ちましたが、漢字力は六年生以上になりました。作文を見た六年生の先生が「六年生よりもずっと漢字が多く使われている」と言って驚くほどでした。

井深　それは、初めは、“読む”のだけですか。（著者注、文部省の“読み書き同時教育”に対して、石井方式は“読み書き分離”の“読み方先習教育”を主張しています）

石井　読みと書きと一緒にやっていました。

井深　両方一緒に？

石井　ええ、一緒にやりました。“読み書き分離”という考えが出たのは、それからずっと後なんです。

井深　ああそうですか。はい。

石井　それから、一年生に戻って、今度は指導要領通りのやり方……つまり、最初は仮名で学習させ、あとで漢字を学習させる、というやり方をやってみました。最初仮名で学習した子供たちが、漢字を学習する時、どういう反応を示すか。最初から漢字で学習していた子供たちと、どんなに違った反応を示すか。それを自分の目で直接確かめてみたかったからです。昭和三十一年から三十三年にかけて指導してみてわかったことは、「漢字書きすべき言葉を、先に仮名で学習すると、それが漢字学習の妨げになる」ということでした。昔も今も、小学校の先生がみんな悩んでいることに、こういうことがあります。「漢字を習って、それが書けるようになっても、作文やノートにはなかなか使えるようにならない」ということです。つまり、テストすれば書ける漢字が、作文に、は使われない、ということです。

井深　ああ、そうですか。ほう……。

石井　「テストすれば書けるのに、作文にはなぜ使わないのか」これは、私が指導主事当時も、よく受けた質問です。

井深　身についていない、ということでしょうかね。

石井　ええ。まあ、そういうことになりますが、それは“反復練習”の不足

に原因するものではないんです。ところが、「それは、まだよく身についていないためだから、もっと練習しなさい」ってなことを言って済ましているんですね。

井深　はーん。

石井　ところが、そうじゃないんですね。先に仮名書きで学習させますと、それがその言葉のパターンになって頭の中に納まってしまいますから、あとで学習した漢字は、身につかないんです。また、仮名のパターンをこわして漢字に置き換えることは、最初から漢字を学習するのに比べてなかなかむずかしいことなんです。

井深　歩くことがちゃんと出来るようになったら、スケートはむずかしい。（著者注＝アメリカの心理学者マグロウの実験によると、まだ、よく歩けない幼児に、歩く練習と同時に、ローラースケートで滑る練習をさせると、歩くことと滑ることとが相互に影響し合って、どちらも上達する。ところが、歩けるようになってから滑る練習をさせると、歩けるようになったことが、滑ることの練習の妨げになって上達しなかった、と言う）

石井　そうです。そういうことなんです。

井深　歩くことと、スケートと、同時にやりゃあ、どっちも身につくんですがね。

石井　ええ、ええ。私、そのマグロウの実験を知った時に、これは私の主張（言葉と漢字とを一緒に学習させるという）の理論的な裏づけに役立つなあ、と思いました。

井深　今われわれが言っている「日本語が定着しちゃったら、外国語は遅すぎる」んだという……それと全く軌を同じくしますね。

石井　そうなんです。日本の教育というのは、明治以来、仮名で読み書きするという習慣をまずつけてしまうことなんです。そうすると、その学習に成功すればするほど、漢字学習は困難なものになるんです。

井深　“難しさ”の意味というものが、大人なりの解釈で扱われていて、子供にとって、何が難しいか、迷惑か、ということは、ひとつも考えていない（笑い）。

石井　ええ、そうなんです。

井深　仮名が定着しちゃうと、後から漢字を入れても、漢字に対する抵抗力ができちゃう、とそういう言い方をしてもいいですね。初めから漢字をやって、仮名なんかひとりでに覚えるんだ、と放っておいたっていいんだ。漢字の方がノルマルなんだ。ということになっておけば一生懸命字を覚えるようにる、と。

石井　ええ。ですから、最初に社会の標準的なものを教える、ということですね。どこの学校だって、“がっこう”なんていう看板を掲げてる所はありませんよ（笑い）。にもかかわらず“がっこう”という書き方を教えているというのは、私、大変な間違いだと思うんです。私はそのことを、実際の指導によって確かめた、ということなんですよ。